
時計迷宮

鈴夜 音猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時計迷宮

【Nコード】

N9624L

【作者名】

鈴夜 音猫

【あらすじ】

普通の大学生、佐倉葵は連絡のとれなくなった友人、宮川アリスを探しに彼女の家に向かったのだが

『おかけになった電話は……』

数回のコール音の後、聞こえてきたのは機械的な女性のそんな言葉だった。

「何で出ないのよ、あの子……」

携帯を見つめ、私はため息をつく。

電話をした相手は友達の宮川アリス。

彼女は数日前から大学に顔を見せなくなり、遂には電話さえ繋がらなくなっていた。

「仕方ない。家まで行ってみるか」

彼女の家は大学からそう遠くない。

私は何度か通った彼女の家までの道のりを思い出しつつ、歩を進めた。

アリスの両親は旅行好きで、よく家を空ける。

小さい頃はアリスも付いて行っていたらしいけど、高校生になった時。転校ばかりの生活に歯止めをかけるために彼女は一人暮らしをすることにしたらしい。

私が彼女と会ったのはそんな時だった。

白い肌に長い黒髪。

第一印象は儂げな美少女だったけど、意外にも彼女は自分の意見をしっかりと持っていて。そして頑固な子だった。

「アリス！ 私、葵！ アリスいないの？」

チャイムを鳴らしても、ドアを叩いても、声をかけても。

アリスの部屋のドアはただ私の手に、その冷たさだけを伝えてきた。

「どろしたっていつのよ……」

「あの……」

途方に暮れる私の耳が、背後からの呼びかけを捉えた。

まさか自分ではない、と思いつつも振り返った私は、そこに立つ人を見た瞬間絶句した。

振り返った先にいたのは、ウサミミのついたスーツ姿の男の人とネコミミフードの男の子だった。

「失礼ですが、佐倉葵さんでしょうか？」

「え……？そう……ですけど」

よく分からない二人組の登場に、私は思わず肩にかけたバックを抱き締めた。

「……何か、ご用ですか？」

「私達はあなたを探しに来たのですよ、佐倉葵さん」

警戒する私に、ウサミミ男は微笑む。

「どこからどうみても怪しい……」

「何なのあなた達……」

「これは失礼を……私はウサギと申します」

「僕はチャシャ猫。よろしくね、お姉さん」

ウサミミ男の隣でニコツとネコミミ少年は笑う。

そのブルーの瞳に見とれかけのをなんとか抑え、私は二人を軽く睨んだ。

「悪いけど、私はあなた達のことこれっぽっちも知らないわ」

「そうですね。しかし私達は、宮川アリスさんのことを存じております」

「え……？」

ウサミミ男の口から飛び出した思わぬ名前に、私は言葉を失った。

なんで？

なんでこの人達はアリスの名前を知ってるの？

「僕らと一緒に来てくれるなら、アリスさんのこと教えてあげる」

ネコミミ少年の言葉は危険な臭いのする交換条件。

けれどアリスという名前に、私は意を決した。

「一緒について……どこへ？」

「私達の世界、時計迷宮です」

ウサギの運転する車に乗せられてどれくらい経ったのか。

ガタガタとした道に行く車に、さすがにお尻が痛くなってきた頃、私は痺れを切らし口を開いた。

「ねえ！ いったいどこまで行くの？」

「ですから時計迷宮です」

済ました顔でそう宣ったウサギに私は深い溜め息をつく。

その時計迷宮とやらがどこにあり、どんなところなのか私には検討もつかないんだけど。

もうウサギの答えをあてにすまいと決めた時、ふと私はあることに気付いた。

「……ねえ、チャシャ猫くんは？」

そういえば一緒に車に乗り込まなかった気がする。

なんで今まで気付かなかつたんだろう。

「彼にはまた後程会えますよ。さあ、着きました」

やけにあっけらかんとしたウサギに首を傾げつつ、言われるままに

車から降りる。

「何ここ……日本じゃないみたい……」

目の前に広がる光景。それは日本どころか私の知る世界のどこにもない。

大木のように太く大きなキノコや、色とりどりの巨大な花がビルのように立ち並んでいる。

それらを見上げながら、私は自分が小さくなってしまったような感覚に陥っていた。

「でか……」

「まあ、あなた方にとっては異世界ですので。おっと……葵さん、急ぎましょう」

ポカン、と上を見ている私を後目に、ポケットから出した時計を確認したウサギが先立って歩き出す。

それに気付いて私は慌ててウサギの後を追った。

「遅れればまたあの方を怒らせてしまいます」

「あ、あの方って？」

「……女王陛下、です」

何とか追い付いた私に、ウサギはこちらを振り返ることなく静かに

そう言った。

巨大なキノコと花の林を抜けて、辿り着いた先にあったのは、蔦の絡まる西洋風の屋敷だった。

ウサギは迷うことなく中へと進み、赤絨毯の敷かれた廊下をスタスタと進んでいく。

廊下の左側には窓があり、右側には幾つもの扉が並んでいる。

ウサギは最も奥にある、一番大きな扉を開けた。

「遅かったですわね、ウサギ。一分の遅刻です」

「申し訳ありません、女王陛下」

部屋に入ってすぐ降ってきた凜とした声。

私達が立つ場所よりさらに高い場所、まるでピラミッドのように段々になっている一番上に一人の少女が座っていた。

豪華な細工が施された椅子に座り、口元を扇子で隠している彼女の表情は読みにくい。

けれど私達を見下ろすその瞳は、どこか楽しげだった。

「たかだか一分でしょ……」

「ウサギ、その娘はなんですか？」

私の呟きが聞こえたのか、女王の視線が私を捉える。

そしてまるで汚らわしいものでも見たかのように、彼女の綺麗な顔が不機嫌そうに歪んだ。

「こちらは佐倉葵……」

「その者の名など、興味ありませんわ」

ウサギの答えを遮り、女王は彼を睨み据えた。

しかしウサギは動じることなく、すました顔で頭を下げる。

「失礼を、陛下。この者は新しいアリス候補でございます。」

「は………？」

聞きなれない”アリス候補”という言葉に、私は開いた口が塞がらなかった。

「ちょっと待つてよ、アリス候補って何？ 私は友達のアリスを探しに来ただけよ」

「探しに来た？ それはどのアリスをかしら？」

慌てる私と対照的に、女王は楽しげな瞳を私に向けた。

「宮川アリスよ、私の友達の。ここにいてチャシャ猫くんが…」

…

「チャシャ猫？ 聞き覚えのない名前ね。それは誰？」

「ウサギと一緒に私を連れに来た男の子よ！」

聞いていることに中々望んだ答えが帰ってこない。

イラつく私を後目に、女王は口元を扇子で隠したまま小首を傾げた。

「おかしなことを言う娘ね。そんな者は知らないわ。それと、お探しのアリスさんだけど、ここにはたくさんのアリス候補がいたわ。だからいちいち名前なんて覚えてなくってよ」

「なによ……それ……」

アリスの手掛かりがあるかもしれない、と怪しい二人に着いてきたのに、これでは意味がない。

「ウサギ」

途方に暮れる私を無視して、女王はウサギに視線を移した。

「一体どういうことなのかしら？ お前はその娘に説明をしたの？」

「いいえ、女王陛下」

あっさりとしたウサギの答えに、女王の表情が一気に険しくなる。

「ではお前はろくな説明もせず、この娘を連れてきたというの？」

「申し訳ありません」

咎めるような女王の言葉にウサギは深々と頭を下げる。

しかし言葉とは裏腹、ウサギの口元には微かに笑みが垣間見えた。

女王も気付いたのか、ますます眉間の皺が深くなる。

「この者でしたら、必ずや陛下のお気に召すものと……」

「自信があるのね」

女王の問いにウサギは答えなかった。

しかしその無言に肯定の意を感じ取ったらしい女王は、ウサギを睨み据えたまま言い放った。

「……いいわ。好きになさい」

「ありがとうございます」

女王はそれきり何も言わなくなると、ウサギは女王に一礼し、踵を返した。

そのまま部屋を出るウサギを慌てて追いかけながらふと振り返ると、女王のいた椅子には誰も座ってはいなかった。

「ちょっと！…どっぴいっことよ！」

「何がです？」

廊下に出てすぐウサギに詰め寄る。

けれど全く動じる様子もないウサギはにっこりと笑っているだけだ。

「何がって……あのねえ、この状況の説明をしなさいよ。突然現れて、時計が何だの、アリス候補だの……訳がわからないわ」

さっきの女王の話だと、前のアリス候補の子達は説明を受けていたみたいだった。

だったら説明すべきでしょう。それに……

「私はあなた達が友達のアリスのことを教えるっていうから……」

「ああ。そういえばそうでしたね」

思い出したというようにポン、と手を打ったウサギにイラッとする。

「……もういいわ。私、帰る」

「おや、帰られるんですか？」

ウサギの横をすり抜けて歩き出すと、普通に彼も後をついてくる。

「どうせ全部デタラメなんでしょ？ だいたいおかしいわよ、あなた達。グルかと思えば女王はチャシャ猫くんを知らないっていうし」

「陛下は本当にご存じないのだと思いますよ」

「あつそ。だとしても、もうあなた達の悪ふざけに付き合ってもらえないわ。私は帰る」

長い回廊に私達の声と足音だけが響く。

けれど背後から聞こえていたウサギの足音がふとしなくなり、私は足を止めた。

「残念ながらお帰りいただくわけにはまいりません」

背後からウサギの声が聞こえてくる。

ゆっくりと振り返ると、さっきの憎たらしい笑みとは違い、どこか不気味さを感じる笑みを浮かべたウサギが私を見ていた。

「何と言われようと私は帰るわ」

気味の悪いウサギから目を反らし、私は入ってきたドアを探した。

「お探しの出口ですが、もうございませんよ」

「何言って……」

ウサギの言葉に辺りを見回すけど、彼の言う通り、入ってきたドアがあるはずの廊下の右側にはドアも、ましてや窓さえもなかった。

「な……んで……?」

「私達がこの屋敷に入った時、外に通じる全ての出入口はなくなりました」

淡々と話すウサギの言葉に愕然とする。

「じゃあ…出口ないの…?」

「あるにはありますが、目には見えません」

「は?」

あるにはあるけど目に見えないってどういふこと?

「出口とは必要な時に現れるもの。今はまだその時ではないということですよ」

ポカン、とする私に、ウサギは飄々と答える。

「じゃあどうしろって言うの？」

「葵さんが真のアリスとならなければ、道は開けるかもしれませんがにこやかなウサギの言葉にため息が出る。

ようはアリスとやらにならない限り、逃げられない檻の中に閉じ込められたってことなんだ。

「分かったわよ。で？ アリスになるためには何をすればいいの？」

「まあそう焦らずに。この屋敷内にはさまざまなたまご時計がごぞいます。それらの中で気に入ったものをお探しください」

「なんか分かんないけど……気に入ったものでいいのね？」

確認するように問いかけた私に、ウサギはにっこりと頷いた。

「あ、いたいた二人とも！」

遠くの方から、高い少年の声が聞こえてきた。

見れば、今まで姿が見えなかったはずのチャシャ猫くんがこちらに向かって走ってくる。

「チャシャ猫くん！ 今までどこに行ってたの？」

「ごめんね、ちょっとヤボ用で」

今時使わない言葉を使い、えへっと笑うブルーの瞳の少年。

なんだか噛み合わない……

「それより女王とは会えたの？」

「はい。今から屋敷内を案内しようかと」

「いいね！ じゃあ、さっそくこの部屋を見よう！」

言うが早いか、チャシャ猫くんは一番近くにあるドアを開けた。その瞬間、さまざまな音が耳に飛び込んできた。

八ト時計や、目覚まし時計のいろんなアラーム。

それらが奏でる音は煩い程に私の鼓膜を刺激してくる。

「さあ、この中からお好きなものを選びください！」

「はあ?! この中からって……」

半ば叫ぶように言うウサギに叫び返すけど、自分の声すらまともに聞き取れない状況。

選ぶ以前に割れんばかりの騒音に頭痛がしてくる。

「……っ！ ちょっと、早くドア閉めて！」

ドアノブを掴むチャシャ猫くんの服を引っ張ると、彼は気付いてドアを閉めた。

「どれか好きなのがあった？」

「あるわけないでしょ！ ていうか煩すぎ……」

さっきの騒音のせいで頭がクラクラする。

しかし目の前の二人は全く動じず、不思議そうに首を傾げた。

「あの中なら絶対一つは気に入ると思ったんだけどな」

「葵さんは案外わがままですね」

「いやいや、あなた達が非常識なんですよ。」

と、突っ込みかけるのを何とか飲み込み、代わりにため息をつく。

「じゃあとっておきのものを見せてあげるよ！　ね、ウサギ」

「そうですね…行きましようか」

訳の分からない私を置いて、二人はうんうんと頷いている。

……もう勝手にして。

半ば諦めた私は、先を歩く二人に大人しく付いて行ったのだった。

辿り着いたドアを開けると、中は豪華な調度品で整えられた部屋だった。

「次はまとも……」

思わずそう口に出していたけど、次の瞬間、私は頭の中でその言葉を訂正せざるをえなくなった。

部屋の中央に不自然に置かれた柱時計。

そしてそれは、単なる柱時計ではなかったのだ。

「なに……あれ……」

「なについて、見ての通り」

「柱時計ですよ」

愕然とする私にすました顔で答える二人。
けれどあれはどう見ても。

「……女の子、でしょう？」

そう。その柱時計は文字盤がなく、代わりにあるのは悲しげな少女の顔。

そして華奢な体の中央に、規則正しく揺れる振り子が見えた。

「葵さん、彼女が気に入ったの？」

「気に入ったとかじゃないわ。何なのよこれは？」

「見て分かりませんか？　彼女は少しづつ柱時計になっているのです」

事も無げに言つてのけるウサギに詰め寄ろうとした時だった。

『……………ああ、い？』

「え？」

聞き覚えのある声を耳が捕らえ、私は視線を巡らせた。

「アリス……………？」

確かに聞こえたはずのアリスの声。
けれどどこにもアリスの姿はない。

『あ、おい……………』

「……………まさか」

信じられなかった。

けれど紛れもないアリスの声で私を呼んだのは、少女の顔をした柱時計だったのだ。

「アリス?!」

パツと見ただけでは分からなかった。

それ程までに変わり果てた彼女の姿に私は愕然とする。

「ちょっと、どういふことよ!」

「どうもどうも……先程申し上げました通り、彼女は柱時計になっていってるのです」

振り返った先にいるウサギはすました顔で飄々と言ってるのける。

「アリスを助けて!」

「無駄だよ、葵さん」

思わず叫んだ私に、チャシャ猫くんは淡々と答えた。

「残念だけでもう手遅れだ。ほら、もう彼女の顔も半分以上、時計になりかけてる」

言われて見てみれば、アリスの目や鼻がだんだんと消え、代わりに文字盤が浮かび上がっていた。

「うそ……お願い、何とかしてよ! このままじゃ……」

『……………あお……………い』

ウサギに向かって叫ぶ私を引き留めたのは、他でもないアリスの声だった。

慌てて振り返れば、彼女は唯一残った口でゆっくりと語りかけてくる。

『に……………げて……………』

「アリスも一緒に……………！」

『だめ……………』

駆け寄った私が見えているのかは分からない。

けれど私は、確かにアリスが首を振ったように思えた。

そして、そんな彼女の唇は段々と色をなくし、文字盤に溶けていく。

『あなた、は……………い……………き、て……………』

「アリスー！」

だんだんと小さくなり、やがて消えた唇の代わりに、針が現れる。

そして部屋にボーンという時間を告げる鐘が鳴り響き、彼女は完全に柱時計になってしまった。

「アリス！ アリス！」

その後何度呼びかけてもアリスが答えることはなく、ただカチコチと時を刻んでいるだけだった。

もうアリスだと分かるものは何もない。

「なんでこんな……」

「彼女は真のアリスではなかった。ただそれだけのことですよ」

呆然としかけた私を引き戻したのはウサギの淡々とした声。

「真のアリスでないと分かったものはこの部屋で時計に変えられま
す。……そう、まさに彼女のようにね」

「そんな……」

真のアリスとやらでないと分かったら、私も時計にされてしまうの
だろうか……

目の前にいるアリスのように……

「時計になるのは決して悪いことじゃない。何も考えず、ただ一秒
一秒時を刻む……喜びも悲しみさえも感じない。なんたって彼女は
完全に柱時計になってしまったんだから」

喜びも悲しみさえも感じない……

頭の中でチャシャ猫くんの言葉がこだまする。

ずっと時を刻むだけの存在、それは悩んだり苦しんだりすることは
ないかもしれない。

けれどそれは人間として生きること奪われた空しい存在でしか
ないように思えた。

「まさか……さっきの部屋で見た、あのたくさんの時計は……」

「葵さんって勘がいいんだね。その通り、あの時計達は元アリス候
補だよ」

「そんな……っ」

驚愕する私に、ゆっくりとウサギは歩み寄り、にっこりと微笑んだ。

「さあ、葵さん。あなたはどんな時計になりたいですか？」

「嫌よ、時計になるだなんて……！」

ゆっくりと近付いてくるウサギに、私は思わず後ずさった。

「時計になるのはそれは痛い思いをするんだ。全身を時間というナイフで切り刻んでいくから」

目の前にウサギ、そして視界の隅でチャシャ猫くんが淡々と言葉を続けるのが見える。

「肉や骨はもちろん、その人を形作るもの全てを切り刻み、そうして時計が出来るんだ。……一生、時を刻むだけの存在にね」

「いや……やめて……！」

とうとう背中が壁にぶつかり、それ以上下がれなくなった。

そんな私の腕をウサギが掴む。

「心配はいりません。あなたは真のアリスだ」

「……え？」

ウサギの言ったことに頭がついていけない。

今、真のアリスって言った…？

「やっぱり……」

小さく呟いたチャシャ猫くんは、喜ぶよりもどこか落胆したようにため息をついた。

その途端、足元がグニヤリと波打ち、バランスを崩した私は床に倒れ込んだ。

「な、何……？！」

『行かせはしない……』

聞こえたのは苦し気な女の声。

けれどその姿はどこにも見当たらない。

「ウサギ、お出ましたよ」

「そのようですね」

さして慌てた様子もなく、ウサギとチャシャ猫くんは顔を見合せ頷き合う。

「何？どうなって……」

「真のアリスを僕らは探してた。けど、たった一人それを望んでない人がいたんだ」

「それって……」

たった一人、ここにいない人物の顔を思い浮かべ、チャシャ猫くんを見る。

すると彼は、ゆっくりと、しかしはつきり頷いた。

「それは、女王陛下だよ」

「女王はここを支配する絶対なる存在。だけどただ一人、彼女を脅かす存在がいる」

淡々と話すチャシャ猫くんはどこか苦しそうだった。

けれど、それを問う前にウサギが口を開く。

「それが真のアリス……葵さん、あなただ」

まだグニャグニャと波打つ床に真っ直ぐに立ち、私を見下ろす二人。

いっぺんに起こった出来事に頭がパンク寸前だけど、すぐに頭に浮かんだ疑問を二人にぶつけた。

「その真のアリスって何？ 私はただの大学生で……」

「アリスとは、この世界の主となれる少女のこと。強い意思を持つ、清らかな少女」

私の腕を掴むウサギの手に力がこもる。

そのせいで生じた痛みを顔を歪めながら、私はウサギを睨んだ。

「あなたは何事にも屈しない、強い瞳を持っている。まさに私達が探していた真のアリスだ」

「訳……わかんない……」

ウサギの言葉に恐怖に近いものを感じた。

時計にはされないみたいだけど、何だか助かった訳でもないみたいだ。

「……ウサギ、早く葵さんと行くべきだ」

チャシャ猫くんがウサギにそう言った時だった。

急に空気がぐん、と重くなり、体が床に押し付けられるような感覚に襲われる。

『逃がしはしない……』

さっきよりはつきりと聞こえた声は確かに女王のものだった。

けれど相変わらずその姿はどこにもない。

「陛下は今、この屋敷自体ですから、探しても見つかりませんよ。もっとも、口でしたら天井にございますが」

「……なっ……なんで天井に、口が……」

ウサギの言葉に天井を見上げると、文字通り、天井に口がある。

そしてよくよく部屋を見渡してみれば、目や鼻が部屋のあちこちに現れ始めていた。

「あーあ……全く……女王陛下はせつかちなあ……」

天井を見上げたチャシャ猫くんが、笑いを含んだ声で呟いた。

ふと見ると、額に汗が浮かべた彼が、空虚な目を私に合わせた。

「これが僕らの秘密……」

「チャシャ猫くん……足が……」

チャシャ猫くんが示したのは自分の足。

そしてその足は、だんだんと椅子へと変化していたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9624/>

時計迷宮

2010年10月11日04時04分発行